

Close up

画に対する老舗の回答

シアター画質のプラズマテレビ



PDS4233J-S

徹底的なまでの画質へのこだわり

高品質な画とこだわりの機能 富士通ゼネラルのAVM

42インチ、50インチ、61インチと、大画面の領域でラインナップの充実を図る富士通ゼネラル。民生用ではホームシアターを軸に、こだわりのある画質でユーザーに訴求していくという。その根源となるのは画作りに対する技術者たちのこだわり。それが具現化したのがAVMである。

ファンを魅了する ファインモード

富士通ゼネラルの製品において、AVファンが目玉するのは「ファインモード」と名づけられたホームシアター表示画像である。

このファインモードは、部屋の明るさを日常より落とした条件下で見るときのモードで、これまでのプラズマディスプレイならノリニアの階調表示が滑らかにならず、微妙な階調差が失われたり、階段状の偽輪郭につながりやすい表示環境である。

もちろん、ここで見られるのは暗部階調の豊かさが試される映画だ。その映画を「ファインモード」は的確に再現すべく、周到な調整を繰り返して、プリセット値を定めている。

色温度などはユーザーが自ら調整（RGB256段階）できるものの、実際はメーカープリセットでほぼ満足できるのではなからうか。しかも、色再現が非常に安定しており、ばたばたとした挙動を示したり、輝度によって色調が変わってしまうといった破綻がほとんどない。

ホワイトバランスのトラッキングも丁寧に追いかけており、他社のプラズマディスプレイにありがちな緑かぶりもうまく補正できている。

ワイドVGAパネルの4233Jについては、ハイビジョン画像をその画素数まで落とさなければならぬが、エッジの抽出が確かなので高い尖鋭感が維持され、一見フル表示かと錯覚させる。

しかし、画像設計者は怒るかもしれないが、試作製品の画質はといえば、もつと粗いものだった。改善点を忌憚なく指摘してくれという申し出もあり、遠慮なく指摘した結果、この画質が出来上がったことである。

ということは、富士通ゼネラルが作り上げたAVMという回路が非常にフレキシブルであり、相当踏み込んだ調整が可能であることを意味している。この回路を積んだ富士通ゼネラルの今後の製品についても、目が離せない。

独自のチップは 老舗のこだわり

改めてここで記すまでもないが、富士通ゼネラルはプラズマディスプレイ



TEXT: 松山凌一